

## 【巻頭言】

## 私と学友会

京都医療科学大学学友会 副会長 西谷源展(44回生)

私は昭和44年(1969年)にレントゲン技術専修学校 44回生として卒業した。当時修業年限が2年制から3年制への移行期にあり、学校は3年制に移行する過渡期に専攻科を2年間設置した。その専攻科の1期生として昭和45年(1970年)に卒業した。

学校は3年制となったが常勤の専任教員は、滝内政次郎校長と山田勝彦先生(31回生 現名誉会員)だけであった。そこで少ない専任教員を補うために、私は学校に採用され勤務することとなった。

昭和46年に卒業生で専任教員ということで学友会理事となった。当時は卒業生として初代の高橋藤綱先生が会長を勤められていた。私の担当は会誌の編集であった。当時は「レ専学友だより」として1年に2回ほどが発行されていたが、不定期であることや内容が専門学校の記事に偏り、会員からの投稿も少なかった。そこで抜本的に改革がなされ編集委員会が作られ、委員長を西村健司氏(28回生)が担当された。私も委員として参画し、とりあえず1年に4回定期発行することを目標に、会員から記事を募集しながら編集を行った。西村編集委員長は第44号から79号まで編集担当理事として活躍された。

昭和56年、会長に仲川庄次氏(4回生)が就任され、編集委員長は森信一氏(29回生)に引き継がれた。森委員長の下で私も編集担当として参画した。森委員長は80号から111号までの編集を担当された。その間に仲川会長が任期途中に逝去されたため、会長代行を勤められた清水篤三副会長(21回生)が、翌年から会長に就任された。

平成元年、短期大学開学と同時に会長に今津博氏(22回生)が就任され、編集委員長は後藤正季氏(34回生 現名誉会員)となった。委員は私を含め6名であった。後藤委員長は112号から128号までを編集された。

その後、編集委員長は厚東正之氏(35回生 現名誉会員)が担当、会長は後藤正季氏から石山忍氏(36回生)へと変わったが、129号から183号まで尽力された。平成19年(2007年)に桒藤眞純氏(43回生)の会長就任時より学友便りはA4版に変更された。さらに平成23年(2011年)、神澤良明氏(43回生)の会長就任時より現在のカラー印刷となった。

学友会の活動の大きな柱である「学友だより」を休まず発行できているのも、会員の皆様をはじめ編集担当役員の努力の賜物である。私は44号から128号まで編集委員として参画できた。

もう一つ、学友会組織をまとめるうえで重要なものが「会員名簿」である。昭和45年(1970年)以前、会員名簿は不定期発行で、その後から2年毎に定期発行している。1970年当時は学校の父兄会との共同発行となっていた。1974年からは単独での発行に変わっている。現在、同窓会名簿はほとんどの他の同窓会組織で、個人情報保護の制定により発行を停止している。しかし、行き過ぎた個人情報保護のために、同窓会組織そのものが新入会員情報すらつかめない状況にあり、崩壊寸前の状態にある。そのような情勢の中で2年毎の発行を維持している同窓会組織は少ない。しかし、卒業生がほぼ診療放射線技師という同一職種にある本会では、縦横の絆を強固にしていくには必要なことだと考えている。

44年間、22冊の学友会会員名簿発行に私は関わってきた。発行当初は全員に無償頒布していたが、学友会財政の健全化のために現在有償としている。今後も必要なかぎり継続することが重要である。

学友会が関与した「記念誌」も数多く発行されている。これまでに私が関与したのは「創立50周年誌 透跡」「島津学園70年史」「島津学園85年史」であった。とくに85年史では編纂委員長を務めたが、山田勝彦名誉会員、桒藤前会長、神澤会長の多大な尽力のおかげで、平成24年9月に発行することができた。これも大学や学友会の歴史を永久に残す上で重要である。大学と学友会とが共に協力し合いながらの編集作業でなければ完成し得ないことを痛感した。

本学の前身の専門学校に就職して以来、現在まで学友会活動に参画してきた。学生時から卒業後も学友会を通じて多くの人たちを知り得たことは、私の人生の中での大きな財産である。又、私をここまで育てていただいた大きな会組織と思っている。これからもこの財産を大切にしたい。

以上

